愛犬と登る猪猟の頂点 ②

田宮 治

分岐点の凌ぎ合い

正月を前にした十二月二十六日（土）と二十七日（日）である。山彦会千葉支部では支部長の北嶋氏が牝猪の大物を見事撃ち獲ったことによって、全員やる気いっぱいで、最高の盛り上がりとなっているが、この頃の猪もまた犬に追われ、戦い慣れているのでなかなか思うようにいかなくなってきている。

当然のように私も気を入れて、泊まりがけの出猟となっているが、今日二十六日はやる気とは裏腹に、私のとんでもない失敗によって駄目であった。

出猟のメンバーは北嶋氏と平野さんの三人で、もう何も心配のいらないメンバーである。天気も猟日和で、犬たちも「さあ撃ってくださいよ」という状況であった。出猟の山もホームグラウンドで、毎回やっている猟場を半分にした犬切りの荒猪が根城にしている真竹藪の反対側の山である。

千葉の山はどこでもそうだが、比較的低い山だが、暖かいためか葉の落ちない木々が多く深い茂みが続いている。しかも、すぐ下には必ず民家があり、申し合わせたように何頭かの犬を猪対策で飼っている。今日の犬たちはヨシ号、マロ号、シロ号で、例の犬殺しの大猪をも想定したものである。

この山で先週撃ち獲った大猪は一四七キロもあったので、地元の猟人が言う一〇〇キロ級の猪とはあまりにも違う。初日に撃ち上げた大猪獲りの目標は、そんな意味ではまだかなっていないことになるが、猟をやる上では最高の楽しさがまだ残っていることになる。

地元のベテラングループが猪の大きさを見間違えるわけがない。荒猪はまだ必ず残っているに懸けて三人で出猟したのである。いつもの大杉林に車を止め反対側の小沢伝いに小峰に出ると、すぐ犬たちが鳴き出した。

「そら出たぞ」と三人で顔を見合わせ対策をささやく。そこは真竹の大藪で、すぐ追い鳴きになる。どうも小物で、しかも一頭ではなさそうである。その山の中腹にある小道を犬たちの鳴き声を頼りに、北嶋氏と平野さんが、まず飛んでいった。私はすべてを任せてその場に立ったままで様子を見ることにした。

鳴き声はどんどん北嶋氏たちのほうに行く。よしよし、これで決まるか……とニヤニヤしていると、なんと犬たちは小道を飛び下り、すぐ山の下にある車道あたりに出たようで、鳴き声と一緒に車の音が入ってくる。

「いけない、これはなんとかせんと」と次に打つ手を考えていると、どうも逃げ一手の小物だが追われ慣れているようで、車道ぎりぎりを突っ走り、私の立っている山の下を駆け抜けて出峰の先に飛んでいる。

私は無線で「猪はこっちに来たぞ！　出峰の先に走ります」と告げ、北嶋氏たちの反対側に行くことにした。真竹の中を必死でくぐり抜け、鳴き声を頼りにすぐ下に民家のある少し空いた所で銃を握り直して待ったが、猪は来ないどころか、追われ慣れたものらしく逃げ足が速く、藪だらけのため見失ったようで静かになった。下では民家の三頭くらいの犬たちが狂ったように鳴き騒いでいる。ヨシたちはきっと民家近くで猪を探し

ているはずだ。
こんな低い山である。どんなに藪がきつくても、一度起こした猪なのだ。また必ず見つけ出すからと思いながら、追われれば必ずここに飛んで来るはずと思う雑木林の所まで飛び下りて待つことにした。
五分も待っただろうか。急に小便がしたくなり、銃をすぐ前のナラの木に立てかけ、おもむろに小用をたしていた。すぐ下が民家で、民家の犬たちが私の接近を探したようにワンワン鳴いている。
突然、いま下りて来た峰で、猪に飛びつく時のヨシ号の鳴き声である。「ウウッワン、ワン」と二声。それと同時に三頭の小猪（五〇～六〇キロ）が私目がけて飛び下りて来た。
小物だが、三頭の直撃なのだからたまらない。地響きを立て落ち葉を蹴散らし、凄まじい迫力で落ちて来る。思わず身をかわし、銃を取ろうとするが間に合うはずもない。猪の後ろには、今にも飛び乗る勢いでヨシ号が団子になってぶっ飛んで来た。咬み止めようと必死でギャッギャッと咬みを入れているが、急坂の藪中をものすごい勢いで突っ走っているので、なかなか止められず、アッという間に民家目がけて消えて行った。そのすぐ後ろからマロ号とソロ号が飛び下り私の所に駆け寄って来た。
「どうしたジジ、猪が来ただろう」というように飛びついて来る。「よしよし、ジジが悪い。ごめん、ごめんよ」と言いながら頭を撫で、「さあ行け！」と二頭をヨシ号と猪の跡に乗せてやった。ヨシ号はすぐ下で少しの間止めたようでホッとしたが、そこは民家近くの真竹藪の中である。近寄ろうと下りはじめた時にまた動き出し、三頭の追い鳴きは出峰を回すように北嶋氏たちのいる猪が起きた真竹藪に戻るようである。
小猪といえども三対一では仕方ない。その上、この藪中を逃げ一手なのだからなかなか簡単には止まるものではない。
一流芸の止め犬たちであっても、一番止めづらいのはむしろ小物で、七〇～八〇キロまでの猪である。反対にそれ以上の大猪で、犬たちに反撃でもしてくれたら必ず止められるものである。鳴き声はどんどん遠ざかって行く。
「二番さん、取れますか、どうぞ！」
北嶋氏は待ってましたとばかり、「どうなりましたか」と返してきた。「小物だが三頭は出峰の反対を大きく回り、猪が出た真竹の山に向かっています。犬三頭がいつも鳴く民家から登ったいつもの峠に至急タッを張ってください」と告げる。
「了解、平野さんにすぐ行ってもらいます」
驚いたことに私の後を追って二人ともすぐ近くに来ていたようで、ヨシ号が鳴きながらすぐ下を走り去ったが藪で見えなかったと残念そうである。それでも私が思った以上の上達で、移動タッもうまく張れるようになったことがうれしかった。
「そこまで来ていたのか」
「この藪では仕方ないよ」
「止めると思ったのだけどなあ……」などと話しながらしばらく待つが、とうとう無線にも入らなくなった。
「二番さん、犬たちの声が入りますか」と聞くと、「タッも行ってしまった後だったと言っているし、犬たちの声も入らない」とのことである。仕方なく北嶋氏と合流すべく、銃を立て掛けたナラの木のところまで戻って来た。
あの状況を思い起こして銃を向けて見ると、ほんの一瞬であったがやっぱり良いチャンスだった。二頭は無理かもしれないが、一頭は倒していなければ話にならないように思い残念でならなかった。犬たちがせっかく頑張って作ってくれたこの機会に、絶対あってはならない油断である。いつものように銃さえ手にしていれば、どんなに不意を突かれようと、スコープなしの散弾銃、二発くらいは必ず撃てたはずである。びっしょりの汗をタオルでぬぐいながらしばし立ち尽くしていた。
「ああ、どうしょうもない」
撃って逃したのであれば諦めようもあるが、なんたるお粗末。悔しくて恥ずかしい一戦となってし

まった。私一人の猟であれば、こんな小物は「大きく育てよ……」と見送っていたかもしれない。

今日の猟は全く別である。止め切れずに逃げる猪をどうして撃ち獲るかを知ってもらうための大切な攻め方、つまり「移動タツ」を教えている最中なのである。

タツの常識である絶対に動くな、木を背にしたら木となれの「静かに待て」という伝統の教えから、攻めることで猟の流れを引き寄せる俺れ流に進化させた移動タツの発想なのである。

単独か二、三人でやる止め犬猟で猪を止め切れなく追っかけ、逃げられたらそれで終わりである。しかし、一流芸の犬群ならば、追っかけになっても止めては走りの繰り返しになることと、鳴きが途切れず、どんな時でも犬たちの様子が手にとるように分かるものである。

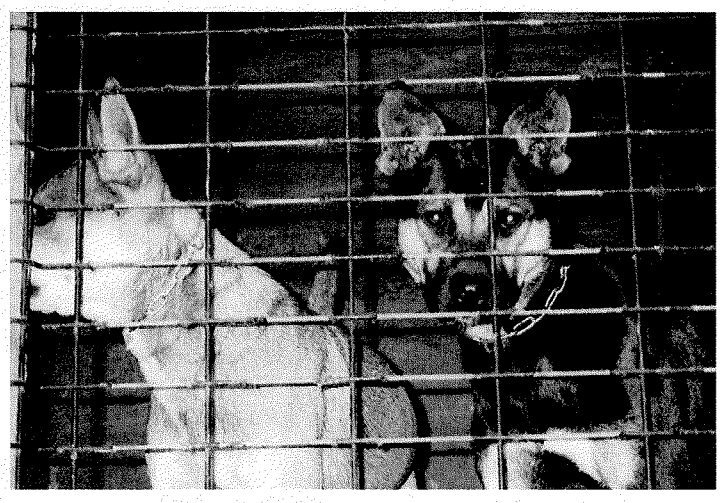
普通にやれば、逃げられる猪に犬たちの様子を見ながら鳴き声を聞き分け、先回りするように自ら攻めてキチッとタツを張る。これが単独猟に欠かせない移動タツである。

あくまでも基本の止め撃ちが上手にできるようになってからのことであるが、いま私が身を張って覚えてもらいたいと思っているのが、この攻め方と、どうしても銃で撃てない時の「止め刺し」である。この二つの技術を理屈なしで覚えていただきたくて、今日もやっとのことで先回りして攻め取った一瞬の絶好機だったのだ。情けなくて悔しくて、一人その場で反省していた。

それにしても、あんな小物でも追われ慣れると凄いもので、誰もが考えられない行動をとる。犬が鳴いている民家や、近寄ってもらいたくない車道を楯に藪の中を逃げ延びようとするものであるが、そんなことまで百も承知でありながら、攻め切れなかった。後悔だけが心に残った。それでも北嶋氏には「まだ三頭も残っていたね。この猪の母親もいるはずだし、目標の犬殺しだってまだいる。まあ、逃げられる時はこんなものだよ」と笑い飛ばしていた。

負け惜しみで言うのではないのだが、確かにそのうちに必ず私たちで獲る猪ではある。だけど小物でも、一瞬の極難の撃ち込みでも今日だけは必ずものにして、犬たちと北嶋氏に勝つ喜びをプレゼントしたかった。たとえどのような理由があろうと、逃してしまった

群馬の山。猪山だがクマもいる。クマは犬たちに追われると、必ずといっていいほど木に登るので、猪より簡単である



▶名犬に登り詰めた三才になるブイ号とカツ号。兄妹犬に千代号と武蔵号がいる

▲先犬に育ってくれたヨシ号と三代目ブル号。素晴らしい止め芸で、いつも最高のチャンスを作ってくれる

のではその先に繋がるわけもないし、何も教えてやれないのだ。

まさに紙一重の戦い。それが分岐点の凌ぎ合いであるが、さらに気を入れて猟キチ丸出しで走り続けたい。そしてこの調子で登り切りたいものである。

紙一重の戦い

その夜は北嶋氏と失敗談も楽しく飲み、笑い飛ばすことで解決した。次の朝は風もなく、すっきりと晴れた猟日和である。今日二十七日は日曜日とあって、山彦会千葉支部のメンバーは六名となった。作戦はいつものように支部長の北嶋氏に任せて、私は犬たちをどう組んで使うかを考え準備していた。

打ち合わせどおりに狩る山は昨日の反対側で、犬殺しの荒猪狙いのようである。今猟期何度もやっている一番好きな良い猟場ではあるが、猪の逃げ道も多い。しかも真竹藪や手の入っていない広い孟宗竹と、おまけにすぐ下には民家が一軒あり、犬五頭くらいを飼っているので、猟をやる上では狩りやすいところではない。

それでもまだ残っている目標の荒猪に的を絞ったことは、どんな猪にも恐れぬ挑戦心の現れであり、今までやってきた猪獲りの自信であると思い、うれしくなりニヤニヤしながら入念な予測をめぐらしていた。

北嶋氏はもう立派な親方でテキパキとタツを配したようで、タツの方々は元気に出発した。「お願いします」と、それを見送ってから北嶋氏と軽トラに乗り込み後に続いた。林道の渡りを注意して見極めながら放犬場所に向かう。

「小物だが入っているね」

大物ではないが確かに昨夕の猪跡だ。

「昨日の猪だよね」

二、三頭の猪が真竹の山を下りて来て大杉林を通って狩る山に入っている。目的の大猪の跡はどの渡りにもなかったが、小物でも入っていれば十分だ。大猪だって我慢して入山しないで油断させる作戦だったので、寝ているかもしれない。

久しぶりの大猪との対決に備えて、犬たちは二秋目の「鳴き」と

「咬み」自在のブイ号、カツ号、武蔵号の三頭としたのである。この三頭ならばどんな猪が出ようと必ずキチッと止めるだろうし、間違ってもケガなどするはずがない。

止め犬猟で最も大切なことは犬たちの組み合わせと使役方法である。犬たちの得意とする一芸を組み合わせるようにして、相性の良い犬たちを一緒に使うのである。私の場合は、常に何十頭もいる一軍の中から出猟するたびに六頭を連れ出すことにしている。

当然のこと群れの猪には六頭ぶつけるが、その時の状況によって二頭、三頭、四頭とかけることになる。あくまでも猪が獲れることを念頭に、どの組み合わせが一番よく猪を止めきれるかである。

次は絶対にケガのないように使役することである。私はこの大切な一戦は相性抜群の二秋目になった兄弟犬三頭で必ず勝てると思ったので、注意も込めて「大猪が出るぞ。俺にかまわず先に行って撃て」と元気を付ける。北嶋氏も私の一言だけで、どんな激戦でも戦えるようになっている。それでも荒猪に対する身軽な準備と考え方の要点を話していると、タツ完了の知らせが入る。

「さあ、行くぞ！」

張り切って北嶋氏の後に続いての入山である。当然犬たちを「よし、行って来い」と頭を撫でながら送り出す。止め犬は見送るのが最後になる別れもあるので、必ず「行って」「来い」と言うようになったのであるが、常日頃そんなことのないようめいっぱい訓練しているのだ。

できる猪猟人ならば、この動きを一目見れば仕上がり具合が分かるように、まず小物が下りて来た山を横に流し、すぐ「この山にはいないよ」というように私たちの所に飛んで来て、これから狩り入る山に向かって駆け登って行く。檜の林を登り、小峰に出る頃には戻って来る犬たちの様子で猪近しの感じがする。

「すぐ出るぞ。これは……」

二人で立ち止まって様子を見る。いつも通るこの峰は昨日狩った奥まで続く大峰筋になっていて、左右に何本もの小峰が出ている。犬たちは檜林から全犬戻って私の所に寄って来た。「猪がいるよ」という合図のように飛びつくので、「よしよし、いるか」と頭を撫でようとするが、それを振り払うように左手に広がる真竹藪の中に飛び込んで行った。

「出るぞ！　北嶋さん」

言い終わらないうちに三〇メートルくらい下で鳴き出した。すでに起きていた猪のようで、全犬が追いの連続鳴きだが、「ギャッ、ギャッ」と食い下がる犬たちをかわし、猪は奥に向かって山の中腹を横切る

小物は20メートルくらいの距離から戦いぶりをよく見ることである。それより近づくと、犬たちが安心して咬むのをやめるので、藪の中に逃げられることがある

プロ猟師は肉が傷むと嫌がるようだが、大物の咬み止めはこのように足を執拗に攻め、尻を落とさせる強力な咬み芸がなければ勝利はおぼつかない。私はこれなくして止め刺しはできないし、最高芸だと思っている（ヨシ号、カツ号、武蔵号、千代号）

ように走っている。

「よし、行くぞ！」と声をかけ、二人で走り出した。「大猪だ、注意しろ！」と、鳴き声目がけて真下に追い落とすようにぶっ飛んだ。

これは目的の大猪に違いない。ブイ号たちが止められないのだから、一時を争うことである。早く行かねばと思うのだが、入ったら最後、見動きできない藪である。必死でくぐり抜け少し空いた小峰に出た。北嶋氏も一本先の小峰をバリバリ音を立てて駆け下りている。彼に撃たせてやりたいが、ここは俺がまず行くよりほかなさそうである。

「全タッ注意！　大猪が出ましたよ」

それを物語るような小峰に残る猪の飛び跡である。歩幅も、足跡の大きさも半端でない。地を崩した大きな足跡を飛び下りながらしっかりと確かめ追えるほどである。

こうなったら必ず俺が撃ってやると心に決め下り続けた。突然、犬たちの声が止め鳴きになった。ワンワン、ギャンギャンと大騒ぎである。いつものように山が割れるようである。

「しめた！　やっと止まったか」

そこからも急坂を駆け下り続け、やっと二〇メートルくらいまで近づいた。その下は馬の背のような細い小峰で、両側は切り立った崖である。その崖下をさらに切り開いて一軒の民家があるではないか。その民家の庭あたりで狂ったように鳴いている。

「しまった！」

民家の庭では大変なことになる。早くなんとかしないことには、その崖を滑り落ちて現場に近づいた。なんと繋がれた五頭の犬たちが必死で鳴いているではないか。相手の猪はおろか、急いで探してもカツ号たちの姿はどこにもない。

そこに北嶋氏も反対側から滑るように落ちて来た。やっぱり思いもよらないこの有り様にびっくり、「てっきり止めていると思って駆けつけたのに……なんだよ、これは?!」とがっかりしていた。

二人で「こんにちは」と大声で家に挨拶し礼を尽くそうとするが、何度呼んでも返事がなかった。

「北嶋さん、こんなところに民家があったかね」と聞くと、「おかしいなあ……」と言いながら表まで回り、「やっぱり下の道から入る一番奥にあるあの家だよ」と戻って来た。

もう一カ月も前になるが、この山を狩るにあたり山の下見の折二人で「迷惑をかけるかもしれないが、よろしく」とお願いした家である。その家の主人は田んぼを作っていて、猪の悪さに手を焼き、

「猪対策に犬たちを飼っている。猪が夜出て来るとすごく鳴くので、その時は放すのだ」と笑いながら話していた。地犬だというが猪猟に使えそうで、鳴き声も私の犬たちとそっくりである。「この山を狩る時はうちの庭に車を止め、あの道を登れば大猪の棲む孟宗竹の山に登るのに一番いいよ」と言ってくれていた。その後も、北嶋さんに一本もって行ってもらっている家だったのである。

猪など獲れなくてもよい。カツ号たちが飼い犬たちの執拗なこの鳴きに見向きもしないで、猪を追い切っていることによく出来たと感心し、犬芸の仕上がりに納得すると同時に心よりホッとした。

二人で、飛び下りた誤解もこれでよかったとしみじみ思い、そのことを話していた。てっきり止めたと思って、途中から私と別れて一歩先の小峰に回り、駆け下りて来たという北嶋氏は、止め現場を挟むように見事に走って寄って来ている。私をいつも見ていて、自ら決断し正確な早い寄りであったので、この民家の飼い犬たちの鳴きに惑わされなければ完勝であったに違いない。

心配した飼い犬との争いでないことを何よりの戦果と受け止め、ひとまず孟宗竹の小道で休み、タツに逃げられたことを報告し犬たちを待つことにした。二人とも汗びっしょりで、疲れ切ったようである。

北嶋氏は「すごい大猪だったね」と残念で仕方ないようで、盛んに悔しがる。「あの足跡の大きさからすると犬殺しの猪だよね」と言うので、「猪跡を見た?」と念のため聞いてみると、私の後ろを走っている時、小峰に残る足跡をキチッと確認していた。

「お見事」

それでなければいけない。止める前にどんな猪と戦っているのかを鳴き声や足跡から判断し、その上で慎重に寄ることが大切なのだと話してやる。

それにしても、大猪はあんな犬たちの鳴き声の届くところに寝ていて、近づく私たちの音と臭いで早立ちし、犬たちに追われると、絶対に近寄らないと思える飼い犬の鳴くあの家目がけ一直線に小峰を突っ走ったのである。まるで飼い犬の鳴き声の中を突破することで、追走のブイ号たちの目線を飼い犬に向けようとしているのだ。そこまで考えていないことには、この逃げ方はできない。

この家と、二〇㍍くらいしか離れていない小峰をそのまま深く落ちる小沢まで突っ走り、小沢伝いに大きく回って小川を渡り、車道の橋下を通って向こうの山に逃れたようである。

普通の猪ならば、こんな小峰を逃げたのでは小沢に下りた所で必ず止められて終わりである。小沢は深いV谷で、その前に登る山には道が横切っていて、突き切れないように金網まで張られている。荒猪ともなればそんなことまで知り尽くしての逃走劇であるから、この戦いは猪様の完勝である。残念で悔しさは残るが、ここは一番タツのためにも気持ちを新たに次に狩る手を考えなくてはならない。

それでも、犬たちは飼い犬の鳴き声を気にもしないで元気に全犬戻って来た。「よしよし、よくやった」と一頭ずつ頭を撫で少しのパンを与える。幸いなことに、沢で大猪と争っていたようだがケガもない。全身泥だらけのところをみると、止めて必死に戦ったが、私たちが寄って行かないために逃げられたという感じである。

「よしよし、よくやった」

何度も声をかけ、慰めていると犬たちも満足そうに目を細めている。「ブイ、カツ、武蔵、行くぞ!」と大声で元気付け、孟宗竹の大山を抜け一番タツの平野さんの待つ真竹原の上に出た。

「おかしいね」

入っているはずの小物が出ない。犬たちはまだまだ元気で、いつも猪を起こす真竹藪の中をバリバリ狩り進んでいる。猪臭はあるようだが鳴かない。

とうとう一番タツの平野さんの所に着いた。大猪にかかりきりで、心待ちにしているタツへの連絡もできずにほったらかしにしたお詫びをしなければと思って近寄って行くと、なんと平野さんが「悪かった」と頭を下げるのであ

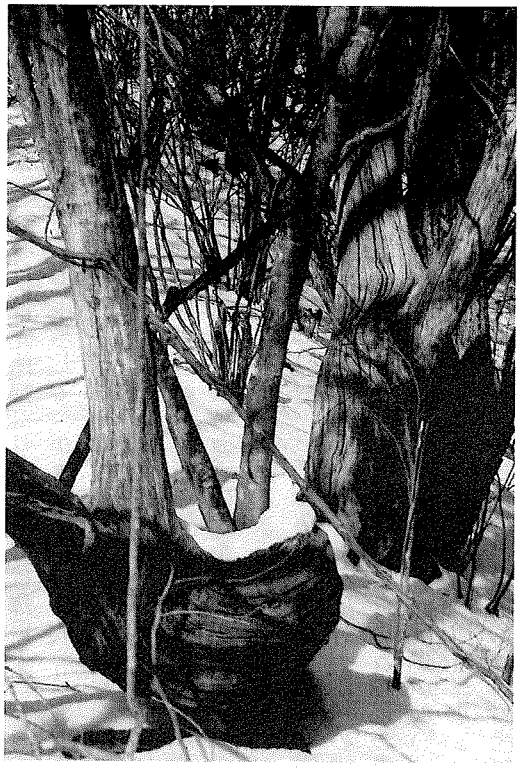
る。

何事かと聞いてみると、犬たちが鳴き出すとすぐ小物がタツのすぐ上に来たそうだが、あまりの早い接近に、さすがの平野さんも犬だと思ったそうである。タツ二〇メートルくらい上の大杉林の中で立ち止まったとのことであるが、今日使っているブイ号とカツ号は黒い犬である。間違っては大変と見ているうちに気づかれ猪は逃がれたようで、残念そうに話してくれた。

私はそんな失敗は当然の確認によるもので、何も気にすることではないと告げたくて、「そうでしたか。あの猪は昨日からのもので、追われ慣れているので仕方ないですよ。今日は大猪と一緒に早立ちして、ここまで逃げて来たようだが、私たちは小物が出たことに気付いてもいなかった」と心から詫びていた。

どんな状況であろうと、二人も勢子に入っているのだ。的確な状況報告はまずもって勢子の務めである。ただそのことを頼りにジッと信じ待っているタツの気持ちを考えると、改めて申し訳なく、全タツに一時も早く引き揚げて昼食にしてもらいたかったので、北嶋氏に連絡してもらうことにした。

犬たちを車に乗せ、日当たりの良い所で昼食をとりながらの反省会となった。それでも先週は二日続けて大猪のオス、メスを獲っているので逃げられてがっかりすることもなく、皆思い思いの意見を述べているが、この猪の逃走劇を実際に見ていないので、想像と現実の間に大きなズレがあるようだ。



私がいつも登る尾根筋の安楽イスも雪に埋もれている

誰だって、普通に猪狩りをやってきてタツの基本で考えれば、わざと民家の近くで、しかも飼い犬の声の上で寝るなど考えられないことである。確かに追われ慣れた猪はどこの山でも考えられない行動をとるものだが、千葉の山は低い。山の下には民家と飼い犬が必ずいる。

そんなことで猪が覚えた、とっておきの逃走術が猪猟人と犬たちを煙に巻くものである。まさかそんな所に逃げるはずがないと思う「民家」や「飼い犬」めがけて飛び下り、車道まで越えて反対の山に逃げ延びるのである。

これはよくあるケースで、想定と現実のギャップ、つまり紙一重の想定外の事実にしっかりと向き合い、これをなんとしても克服するのがこれからの課題である。

地元猟人の平野さんの話では、この辺の猪は民家や犬、大きな道もあまり気にしないということで、例の民家は地形的にすり鉢状態になっていて、どの小峰を駆け下りても、あの民家に突き当たるとのことである。納得。

そして、第二戦は犬たちをマロ号、ヨシ号、シロ号に替えて小物の逃げた山を狩ることにした。この二日間は二、三頭を必ず獲るとの猪狙いであったが、二度、三度の猪追いであり、紙一重の失敗三重奏であった。それもこれも、やってみてはじめて分かる大切なことであり、明日の猟に繋がる重要なことばかりである。

昼からの第二ラウンドは逃げた小物に的を絞り、タツの位置はそ

のままで、勢子が反対方向から追い戻す作戦であった。ところが、すでに起きている小猪は、私たち勢子と犬たちの様子を見ながら少しずつ長い峰伝いに移動していたようで、なかなか犬たちの発見に繋がらなかった。

以前にも説明したとおり、たとえ小物といえども、犬たちに追われ慣れると早立ちしたり、この時のように犬たちにも気付かれない動きで峰の先に先にと移動するのである。

北嶋氏が平野さんの待つ一番タツが三〇〇㍍くらいに近づいて来たので、もう猪はいないと判断してタツに解除を告げていた。「少し早いぞ……」と思ったが、すべてを親方北嶋氏に任しているので、黙って犬たちの後ろに続き猪を追っていた。

「北嶋さん、犬たちの動きがおかしい、出ますよ」と言い終わらないうちに、ヨシ号、マロ号、シロ号の三頭が真竹藪の中に飛び込んで行った。

「ワンワン、ワン……」

ヨシ号の見事な止め鳴きである。「しめた、止めたぞ！」と二人で一瞬立ち止まって対策をとる。北嶋氏は慌てて「全タツは元に戻れ！　猪が出たぞ！」と指示しているが、この下に張っていた二番タツは引き揚げていたようで急ぎ戻るとのことである。この真竹藪は良い寝屋のようで、以前にも八〇㌔くらいの猪二頭を止めたのであるが、北嶋氏と二人で飛び込みひどい目に遭った所である。

止め現場は五〇㍍くらい下で、ちょうどその時と同じように止め切っている。犬たちの鳴き声から伝わってくることは、枯れ竹などの障害物越しの攻防であり、がっちりと咬み込んだものではない。このような状況ではソッと静かに寄るのが原則であり、粗く寄ればアッという間に猪は飛ぶものである。

私は即時に北嶋氏を移動タツとして止め現場の下に回り込んでもらうべく、尾根筋を少し走り出峰を飛び下りてもらうことにした。頃合いを見計らって私もゆっくり犬たちの鳴き声目がけて寄ることにした。分かっていたことだが、分け入ってみるとひどいもので、身動きさえままならず、静かな寄りどころではない。一歩また一歩がボギッ、バリバリの連続である。

「動くなよ、あと少し……」

祈る気持ちで絶対に北嶋氏の待つ所に猪を追い出すつもりで、回り込むように突き進む。

やっとのことで犬たちの攻防が手に取るように分かる斜め横上に立てた。そんなことを追われ慣れた猪が分からぬはずがない。ドドッ、ドッーッ、バリバリと一気に飛び出し、想定した斜め横ではなく、真下に恐ろしい音とともに落ちて行く。当然のことヨシ号たちの咬みは半端ではない。下に飛ぶしか猪の逃がれる道はないのだ。

「下に飛んだぞ！　タツの方、頼みます」

しばらくぼうぜんと立ち尽くし、流れる汗を拭きながら様子を見るが、銃は鳴らず静かなものである。こんな所で飛ばれたのでは動きようがない。仕方なく止め場所を見ると、ぎっしりと枯れ竹が横たわり、その下がほじくられている。猪だけが動きやすい所で、まず三頭の犬が十分力の出しきれる場面ではない。

つまり、追われて来た猪が一番タツの気配に気づき、緊急避難した猪にとって安全な城のような所である。そのことを証明したのが前回の戦いで、ちょうどこの同じ場所で起こし、あと一歩のところで同じように真下に飛ばれた所でもある。その時は下に二番タツをがっちり張っていたから勝負になっただけの話である。

その時も、あと少し……というところで猪二頭が飛んだのであるが、一頭は真下に下りて大杉林を直進し、林道を横切る渡りで棟方氏に二発撃ちかけられるも反対側の山に逃げられた。一頭は私が必死で追ったが、大杉林の小沢伝いに大峰に戻り一番タツを突き切って第一戦の孟宗竹の山に逃れたのである。

ここで問題になるのは、なんで猪がこれほどまでに見事猟人の行動を見抜くのかであるが、私は猪の逃走の武器の一番は鼻の良さだと思っている。タツを臭いで察知

することから始まり、犬群や勢子の接近は犬以上といわれる鼻で判別、音を聞き分けることで逃げ道を決めているのである。そんなわけで、よほど犬たちに急追されなければ、なかなかまともにタツにもはまらないのである。

今回もそのことを物語るように、北嶋氏の移動タツを見事に察知していて、私の接近であと一歩のところが、まさに猪様にとっても一歩踏み出す逃げの常道を決めたということである。当然その下はタツが引き揚げており、悠々といつもの渡りを伝って逃げ延びたのである。

真竹藪は猪にとっては、その体形とパワーからして枯れ竹の山もものともしないでバリバリ突っ走るが、犬たちや勢子には最悪で、入ったら最後出るのにひと苦労する。そんな時にタツからの連絡で、「急ぎ戻ったが、猪は抜けた後だった」とのことである。改めてタツの方々に解除していただくよう北嶋氏に告げ、「心からご苦労さん」と発信していた。

私はやっとのことでタツの待つ林道に出て、北嶋氏と合流。この一戦を振り返り、「なぜ逃げられたか」を聞くことにしていたが、北嶋氏はその前に自ら反省していたようで、「タツを解除していなければ、バッチリはまっていたのに……」とさかんに悔しがっている。私は北嶋氏がすべて分かっていることに満足し、「よい、よい」と笑っていた。

しかし、結果はまさにそのとおりで、先週北嶋氏が撃ち獲った大猪も、あと車まで三〇〇メートルに迫った篠竹藪であった。この時機にありがちな大切な勝負の分かれ目は、残り少なくなった峰筋のどん詰まりにある。そこに潜む追われ慣れた猪に勝つためには、当たり前のことであるが、最後まで絶対諦めてはならないことである。手を抜かずに、どこまでも攻め切る強い気持ちが大切であると繰り返し説明したばかりなのに、生かされていなかった点がちょっぴり残念であった。

しかしながら、猪に逃げられた失敗といっても、この二日間の実戦は実に見事な戦いぶりで、まさに紙一重が勝負を分けたのである。全体的に山彦会千葉支部が急成長を遂げ、このような戦いができるまでになったのは、北嶋氏はじめ全員が素直な目で猪猟を見て、必ずそのとおりにやり抜いた日頃の努力によるもので、本物の実力になってきた証である。

私が日頃から言い続け考えている猪猟の基本は、犬たちとともに猪といかに戦ったかである。猪など獲れようが逃げられようが、大したことではないし、なんの問題もない。問題だと思っていることは、猪猟の基本をどこまで確実に認識していたか、そして、いかに忠実に実行したかということなのである。

何事を達成する上でも、基本をきっちり覚え実行しなければ、どんなに頑張っても大成しないからである。私がこの二日間の猪猟を事例まで上げ繰り返し説明、投稿することで広く猪猟界に問題提起したのは、この大切な分岐点の戦いを必ず勝ち取ることで見事頂点に立ってもらいたいからである。

猪猟を志した者は実戦を体験していくなかで、誰でも必ず突き当たる夢と現実の狭間でもがき苦しむことになるが、厳しい現実に堪えかねて諦め夢のままで終わってしまうか、反対に万難を排して夢を現実の物として勝ち取り、揺るぎないものとするかの分かれ道である。山彦会千葉支部では、ちょうどその時がきたようである。

この時機に私は今までの経験で得た最も簡単で安全有理な戦術をすべて実戦の場に作り出して見てもらうことで、この難関を見事に越えて行く方法をなんとか分かってほしいと思っていた。

そして、願わくば山彦会千葉支部の勇気ある戦いぶりと、一歩一歩確実に登り詰めて行く素晴らしい猪猟の近道を示すことで、全国の猪猟者各位にもなんとか理解していただき、猪猟の目的達成とか、明日の元気に繋がってくれたら最高だと思っているところである。

次回はまた実戦に戻り、銃で撃てない時の「猪の刺し止め」などの頂点付近の激戦を書きます。

（つづく）